

## 二条院讃岐新考

伊佐迪子

### 〔抄録〕

源家出身の二条院讃岐の歌には「出自」が大きく影響している。讃岐が歌を詠出する土壌について考察する必要があるから、伝記的・社会的背景の反映として讃岐歌を読み解く。若い頃の讃岐を『歌仙落書』が高く評価しているが、讃岐の人生は明らかではなかった。『玉葉』を詳細に検討した結果、かなり解明されたので伝記を背景に讃岐歌を読み解いていく。

讃岐の生涯のうち、摂政・関白藤原兼実の秘書・「北政所」を勤めた社会的役割は大きい。摂政家の家経営の中枢にあつて仕事

に専念し、「沖の石の讃岐」として女流歌人の地位も確保しており、讃岐の果たした社会的役割と讃岐歌との関わりを考察する。讃岐は藤原兼実の支援を受けて、六十歳で歌壇に復帰した。「出自」「伝記的背景」「社会的背景」の三つの要素から、讃岐の詩的世界は構築されていると解釈する。

キーワード 沖の石の讃岐、出自、『玉葉』、詩的世界、北政所

### はじめに

従来の二条院讃岐<sup>(1)</sup>の研究は、新古今時代の新風歌壇に返り咲いた二条院讃岐の人生を、推測に頼って描出していたといえる。『玉葉』に見える二条院讃岐像<sup>(2)</sup>によって、人物像をかなり正確に把握できたが、二条院の内裏女房時代以後、それに近接する数年の二条院讃岐像は未

だ解明が不十分である。

本稿では自撰集『二条院讃岐集』を底本として、その人生を通して詠出された歌を手がかりに、内なる詩的世界の構造を明らかにし、二条院讃岐の歌が人生と、どのように関わりあっているのかを解明したい。更に、二条院讃岐はどのような社会的評価を得ていたのか、没後における評価とも併せて考察しようとするものである。以下の論述で

は二条院讃岐を、讃岐とのみ表記する。なお、テキストは冷泉家本『二条院讃岐集』を用いる。<sup>(4)</sup>

## I 二条院讃岐の前半生における詩的世界の構造

### (1) 二条院讃岐の周辺

讃岐の生没を先行研究では正治初度百首の詠出歌を基に推定し、永治元年(一一四一)誕生、建保五年(一一二七)七十七歳頃に没とする考えが定着している。父は歌人・源三位頼政である。讃岐の身边には兄仲綱、十歳程年下の従妹丹後、丹後の父頼行、同じく一族の行頼、三河、美濃などもおり、幼少の頃から父の頼政や近親者達から歌の指導を受けていたと考えられる。

長じて十八歳頃に二条天皇の内裏女房として出仕し、讃岐が「内の御会」で詠んだと思われる左記の歌が、自撰集『二条院讃岐集』<sup>(5)</sup>に見出される。

内裏に柳垂れりといふことを

青柳のなびく下枝に掃きてけり吹く春風やとものみやつこ

花喜ぶ色あり

おのが咲く雲井に君をまちつけて思ひひらくる花さくらかな

旅宿のほととぎす

もろともに旅寝する夜のほととぎす梢やなれが庵なるらん

「初内裏和歌会」は平治元年(一一五九)讃岐の十九歳頃である。右の讃岐歌と同じ歌題が、『重家集』<sup>(6)</sup>にも見えている。その後も「内裏

和歌会」に出詠し、二条内裏歌壇で徐々に存在を認められ、それととも「重家集」にみえる歌人たちの歌会にも参加している。

寺静かにして虫を聞く

かねをだにうちわすれにし山寺の入相は虫の声のみぞきく

右は、讃岐二十三歳、長寛元年(一一六三)に行われた「刑部卿逆修和歌会」での詠出歌で、五年の歳月が讃岐を歌人として育て上げていく。長寛二年(一一六四)讃岐が二十四歳頃に俊恵が『歌苑抄』<sup>(7)</sup>の中で、左記の讃岐歌を高く評価していることから肯ける。

一夜とて夜離れし床の小庭にやがても塵の積りぬるかな

永万元年(一一六五)七月、二条院の崩御である。讃岐は二十五歳であったが、女房出仕辞退の時期は不明である。その後、仁安元年(一一六六)「後白河院当座歌合」に参加した二十六歳頃の、内裏女房経験者らしい讃岐の消息が、定家の『愚秘抄』に見えている。

金吾の口伝のうちに。女房の故実に。兼日の懐紙なき時は。

後白河院の仁安御歌合。

当座にて侍りけるに。讃岐参たりけるに。扇をさし出して題をたまはりけるとかや。まことにある中にきはもたちて。いみじく見えたりけるとなん申侍り。……

右に見える讃岐は、讃岐自身の人間性というよりは、むしろ内裏女房として経験を積んだ習性を具現していると思われるべきであろう。同じ年に『統詞花集』に一首、『今撰集』には「内讃岐」として一首入集している。左記は入集歌の二首である。

あけぬれとまだきぬぎぬになりやらで人の袖さへぬらしつるかな

『統詞花集』

今さらにこひしといふものまればこれも心のかはるとおもへば

『今撰集』

ここで気付くのは讃岐の詠歌分野の変化である。後に「恋歌の女流歌人・二条院讃岐」と評されるが、分岐点は二十六歳頃にあることが解かる。

内裏女房に出仕した讃岐には、行儀作法から対人関係に至るまで、さまざまな制約が待ち受けていたのは当然である。身分社会の中で内裏女房の立場は、ひたすら滅私奉公であり、併せて宮廷行事を遂行する技量も必要であった。万事に控え目な言動と冷静さを保ち、貴人に付き従う習いから一歩身を引いた礼儀を、習性として身につけていたと考えられる。

先行研究では、二十五歳から「別雷社歌合」出詠の三十八歳まで、約十三年間の讃岐像を『尊卑分脈』に見える家系図(8)に拠って推察している。推察の讃岐像は拙稿でも証明不可能であったが、期間の短縮と新たな讃岐像が把握出来たので、以下にその検証を併せて述べていきたい。

承安二年（一一七二）讃岐の三十二歳頃に成立した『歌仙落書』には、讃岐に対する際立った賞賛が見えている。「讃岐の心優しく余情のある歌の詠み振りは父よりも優っており、これから先、讃岐のような歌人は出てこないであろう。更に、女の詠む歌はこのようであつて欲しいと思うし、何よりも讃岐の歌には、可愛さと心惹かれる風情がある。」と述べている。内裏女房を経験し『統詞花集』や『今撰集』

への入集もあつて、頭角を顕してきた女流歌人・讃岐ではある。しかし、過剰な賞賛は『歌仙落書』の成立事情とも絡んでいると言えよう。

選者は久我太政大臣通光卿といわれているが、本当のところはよく判っていないらしい。男性歌人十六人、女流歌人三人の歌に対する批評と、各人に選者の感想歌が一首添えられている。歌人は後徳大寺実定関係が多い。当時は六条家と御子左家との間で際立った勢力争いはまだ見られなかったが、両派では互いを十分に意識しており、御子左家の俊成は後徳大寺実定と繋がりを見せ、六条家の清輔は右大臣兼実を頼みにしていたのである。(9)

『歌仙落書』への讃岐の入集歌は次の四首である。

始思はで後思ふ恋といふことを

今更におもふもいふものまればこれも心のかはると思へば

一夜とてよがれし床のさむしろにやがてもちりの積りぬるかな

後朝恋

あけぬれどまだ衣衣になりやらで人の袖をもぬらしつるかな

旧夫をうらむる恋と云ふ事を

いまさらにかがはすべき新まくらとしのみとせは待侘びぬとも  
『歌仙落書』に讃岐が選ばれたのは兼実との関係からであろう。従つて承安二年（一一七二）三十二歳頃に、兼実の許へ既に女房出仕をしていた可能性は十分考えられる。従妹の丹後が承安元年に、兼実家の家女房に出仕しており、讃岐の三十二歳以前の出仕の可能性も極めて高い。三十六歳頃、父・頼政の『源三位頼政集』が世に出ており、

治承二年(一一七八)三十八歳の讃岐も「別雷社歌合」に出詠したが成績は振るわず、歌と仕事の両立は難しいようであった。

兼実家の家女房・讃岐は、主家の主だった行事の一部分を受け持ったり、幼い姫君の家庭教師的な存在として、姫君(後の後鳥羽后・任子)の成長を側面から支える役目も担っていた。内裏女房の経験を生かし、更なるキャリアを積んでいくことではあったが、主家に対しては滅私奉公であり、一步身を引いて付き従うことに変わりはなかった。内裏女房時代から継続してきた冷静で沈着な身の処し方は、いつの間にか讃岐にとっては習性となり、それは讃岐の詩的世界の内なる「仕事の世界」を自ずと形成していたのである。

ここで讃岐の「出自」にも目を向けておきたい。讃岐は源家の出身である。讃岐が十九歳のとき平治の乱が起り、平家の世になって以来、源氏一族は息を潜めて生きてきた現実がある。ところが以仁王に従った父・頼政と、兄・仲綱とを、宇治橋の合戦で一夜にして失ったのは、治承四年(一一八〇)讃岐が四十歳のときである。その後、寿永元年(一一八二)四十二歳の讃岐は、自撰集『二条院讃岐集』を賀茂社に奉納し、春日参詣をして報告している。源氏一族は更に平家の横暴に耐えながらも、寿永二年(一一八三)の平家の都落ち、その後の源平争乱を経て平家の滅亡を迎え、文治元年(一一八五)平家からの圧迫が断ち切られた。四十五歳の讃岐にとって、このとき「出自」の枷がようやく完全に解消した。讃岐が控え目にならざるを得なかったのは、「出自」による心の自縛を抱えていたからであり、それは讃岐の生き方をも左右し、讃岐に芯の強さを齎し、控え目な人柄を熟成させる役

割を果たしていたのである。

内裏女房として世に出て以来、「歌の世界」・「仕事の世界」・「出自」と、讃岐には三重構造になった独自の内なる詩的世界が拡がっていたのである。「出自」の枷が外れて、三重構造から二重構造へと緩やかになった心理状態は、今までの人生経験から得た身の処し方と、それから得た芯の強さとが相俟って、讃岐本来の人間性を開花させる方向へと向かって行った。それは「沖の石」の詠によって、女流歌人の地位を築いたことにより明らかである。

## (2) 讃岐歌の詠歌手法とその変化

讃岐の詩的世界のうち、讃岐が渾身の想いで歌を吐露する土壌、即ち内なる「歌の世界」に、「出自」の自縛から抜け出た讃岐の心理状態が、どのように表出しているのかを検証してみよう。三十二歳以前の讃岐歌の「詠出位置」と、何に「視点」を置いて詠出しているのかを、先述した『歌仙落書』に見える四首の詠歌により考察する。

- ① 今更におもふもいふもたのまれずこれも心のかはると思へば
  - ② 一夜とてよがれし床のさむしろにやがてもちりの積りぬるかな
  - ③ あけぬれとまだ衣衣になりやらで人の袖をもぬらしつるかな
  - ④ いまさらにかがはずべき新まくらとしのみとせは待侘びぬとも
- ① 相手は思わせ振るな男でよく心変わりをする。それなのにまた、纏わり付いてくる。このやり取りの渦中にはいないで、男を冷静に見て、身を引いた控え目な位置にいる。

視点は男の心の動きを第三者のように冷静に観察し、観察して得た

結果を詠んでいる。

②相手は「一晩だけ」と偽り、離れて行ったので男の姿はない。目の前には主が不在の小庭がある。諦めきれない心情を他人ごとのような呟きで、小庭を前にした位置にいる。

視点は事態の状況と推移とを的確に捉え、第三者的な視点で冷静に見て詠んでいる。

③相手は自分と同じ当事者であり、まだ臥所のなかに二人でいるのであろう。自分も渦中に身を置き、事態を眺めながらの詠出で、臥所の中の詠出位置とは特出した手法である。

視点は相手の袂が濡れた訳を、可愛く説明できる第三者的な視点で詠んでいる。

④相手が姿を消して数年になる。「新枕をしても、どうってこともない」と、恨めしい気持ちを抱きながら実行の姿勢に傾いている。目の前の回想の場面と向き合っている。

視点は恨みも少々垣間見えるが、自分の今の心理状況をよく判断して詠んでいる。

右に見るとおり四首の詠出位置は歌の情景に対応してさまざまである。③は渦中にありながらも慎ましく、控え目に詠まれていることが解かる。詠出視点は四首とも、当事者であり被害者でもありながら、第三者的で冷静な視点である。相手を非難せず、他人ごとのように眺めて、冷静に事態を分析している。表現は柔らかく優しいので、余情が自ずと滲み出て自己を省みる余裕を齎し可愛さを感じさせる。

右のような詠み振りは、日常の讃岐の習性と深い繋がりを持っている

ると見なければならぬ。主家に付き従う礼儀と冷静さ、それに付随する職務遂行により、内なる「仕事の世界」が優先している日常である。三十二歳以前の讃岐の詩的世界は三重構造を形成し、いつも「出自」と「仕事の世界」の緊張が支配し、晴れやかな世界ではなかったのである。

次いで四十二歳から四十五歳頃の「詠出位置」「詠出視点」「詠歌手法」について検証してみよう。左記の二首の①は『二条院讃岐集』に、

②は『千載和歌集』に見える詠である。

①わが恋はしほひにみえぬおきの石の人こそしらねかはくまぞなき

②君こふるころのやみをわびつつはこの世ばかりとおもはましかば

①「引き潮でも見えない沖の水底にある石」と、「乾く間もなく涙で濡れている私の袖」という二つの事象が詠み込まれており、複合的表現の形態をもつ詠歌手法である。

視点は男の上に据えながら、非難もせず、慎ましく控え目な位置からの詠出である。更に「あなたは私の想いに気がついていない」と、男の心の中を見据えながら詠んでいる。

『二条院讃岐集』には第一句を「わが戀」としているが、『千載和歌集』選者の俊成が「我が袖」と改めて世に披露したのである。乾く間もなく濡れているのは袖であるが、わが想いを相手に伝えられない故に、「わが恋」として強調しているのである。しかし、『九大集抄』に依ると、この詠にはあまりよい評価を与えてはいない。<sup>(11)</sup>

②「来世までもこの妄執が続くのかと思ひ悩む心」と、「現世だけの苦しみであると考えることは、かえって非常に淋しいと思ひ悩む心」

と、悩みの事象を複合的に表現している。

視点は題詠歌ではないので、作者自身の心を詠んでいるとも考えられる。「恋のために分別を失った心の迷いを思い悩んでいる」自身の胸の内に詠出視点を置いており、慎ましく控え目な讃岐が、自分の心情を露呈したとも思える歌である。

右の考察で明らかになったのは、讃岐は「複合的表現形態」手法を用いており、詠歌手法が変化していることである。讃岐に重く押し掛かっていた「出自」の枷が一つ外れて、讃岐に備わっている歌人本来の資質が開花したと見たい。

更に、讃岐には「相手を非難する」表現が見当たらない。「非難」を含まない表現は、讃岐の人間性に由来するのも知れないが、歌人としては特出した資質であり、歌の芸術性を高める詠歌才能と言うべきものである。しかし、何よりも讃岐の歌を詠み出だす土壤、即ち、詩的世界の内なる「歌の世界」が豊穡であり、溢れるばかりのエネルギーを蓄えていたことである。「歌仙落書」における讃岐歌の高い評価も、右における種々の検証をもつて十分に肯定出来るのである。

## II 二条院讃岐の後半生における詩的世界の構造

### (1) 二条院讃岐の歌壇復帰

四十六歳になった讃岐は、文治二年(一一八七)六月十六日、兼実家の要職「北政所」に就いた。これは兼実家の来るべき大事業に備えるための第一歩であった。この日の『玉葉』の記述は讃岐を兼実の妻

の一人として遇しており、後に「家宣旨」をも兼ねている。こうして内外ともに兼実の秘書として、主家の中枢において家経営のために忙しく立ち働く毎日であった。そのような中で『千載和歌集』が成立し、四十八歳の讃岐は歌人「沖の石の讃岐」として社会的に地位を得たのであるが、喜びの陰で詩的世界の内なる「歌の世界」とは、次第に疎遠になって行ったのである。

建久元年(一一九〇)一月十一日。摂政・関白藤原兼実女、任子の入内である。兼実家のために、幼い頃から仕え馴染んできた姫君のこの日のために、讃岐は自分を押し沈めて来たのである。この日の『玉葉』の記述に、入内の儀で立ち働く五十歳の讃岐の姿が見えている。その後、姫君は後鳥羽天皇の中宮に冊立し、兼実家は一安堵したが、建久四年(一一九三)に疱瘡が流行し、中宮は病床にあった。

讃岐は内なる「歌の世界」への想いを懐きながらも、内なる「仕事の世界」が讃岐を支配していた為に、長年の想いを兼実に打ち明けかねていた。折から中宮の病が重く、病氣平癒祈願と宿願とを合わせて、春日参詣を願ひ出たのである。五十三歳の讃岐の志を知った兼実は、略式ながら五十人の伴揃えで、「北政所」として春日参詣<sup>(12)</sup>へと送り出したのである。

その後から兼実の讃岐支援が始まった。建久五年(一一九四)讃岐が五十四歳の八月十一日、「中宮和歌会」が内裏で催された。女流歌人の参加は兼実家の家女房・讃岐と丹後のみである。当時の和歌会は私的な性格を持っており、女流歌人が家女房二人というのは、まさしく私的な和歌会であり、兼実が讃岐に歌壇復帰への足がかりを敷いた

のは明らかである。

五十五歳の讃岐に、兼実は「民部卿經房家歌合」への出詠の機会を与えた。兼実は讃岐に「中宮讃岐」を、丹後には「撰政家丹後」の名乗りを与えている。勝敗は勝・持・勝・負・持となり、かなりの成績ではあった。建久六年（一一九五）頃には兼実息・良経も地位が上がリ、「北政所」の職務は良経側へ移り、讃岐は「宣旨」と呼ばれている。そして、建久七年（一一九六）十一月、兼実は土御門通親による陰謀により失脚し、政権の座を追われたのである。

建久八年（一一九七）三月、法然上人のよき理解者であった兼実は、法然上人を招請して受戒している。五十七歳の讃岐は依然として兼実の傍らにあって、兼実の影響により釈教歌を詠む機会も多くなった。建久九年（一一九八）一月、後鳥羽天皇は上皇となり、土御門天皇の即位があつて四月には正治元年となった。正治二年（一二〇〇）讃岐六十歳の冬、「正治初度百首」の詠進をもつて念願の歌壇復帰が実現した。それは内なる「仕事の世界」から、讃岐が渾身の力を以つて脱出を遂げたことに他ならないのである。「正治初度百首」の詠進歌の中で、讃岐は歌壇復帰の喜びを詠っている。

いまはとてさにはべにかへるあしたづの猶たちいづるわかぬ浦のみ  
「二条院讃岐」の復活ではあつたが、讃岐は墨染めの袖であつた。復活の陰には兼実の手厚い支援と深い愛情と、讃岐に対する感謝の念とを見逃すことはできない。その後、讃岐は精力的に和歌活動を展開している。「三百六十番歌合」「廿四番歌合」「石清水若宮歌合」「院当座歌合」などである。六月になると中宮は「宜秋門院」を称し、内裏

を出て東九条に御所を定めた。復活後の讃岐の「三百六十番歌合」には、兼実は「宜秋門院女房」<sup>14</sup>を名乗らせている。

建仁元年（一二〇一）讃岐は六十一歳。精力的な和歌活動が続き、「新宮撰歌合」「和歌所影供歌合」「撰歌合」などに出詠している。そして、建仁二年（一二〇二）六十二歳の讃岐は、「千五百番歌合」に一〇〇首の詠進歌をもつて連なっている。この千五百番歌合の頃が、讃岐の詩的世界の内なる「歌の世界」が最も燃焼した時期であつた。翌年の建仁三年（一二〇三）には俊成九十賀屏風歌にも一首選ばれている。

元久二年（一二〇五）讃岐六十五歳。三月廿六日に『新古今和歌集』が成立し、讃岐は十六首もの入集を見ているが、「正治初度百首」「千五百番歌合」「經房卿家歌合」「二条院讃岐集」「建仁元年の歌合」「兼実家の釈教歌」などから撰歌されている。その後、讃岐ならではの優れた詠が更に選出されて、没後に成立した『新勅撰和歌集』にも収められている。讃岐の歌は若かつた頃の優しい詠み振りに変りはなく、恋歌の讃岐が健在であることを示している。建永元年（一二〇六）九条家の中心人物であつた良経が急逝し、続いて承元元年（一二〇七）には兼実が薨去した。三十二歳頃から六十七歳までの讃岐は、ひたすら慎ましく兼実に付き従う人生であつた。讃岐の内なる「仕事の世界」は、兼実の他界により消滅したかに見えたが、再度、讃岐の上に覆いかかって来るのである。

## (2) 本歌取りと題詠歌

讃岐は自分の若い頃の詠出歌を基にして歌の再構築を図っているが、本来の「本歌取り」とは少し趣が違っている。元歌は多数あるにも拘らず事例が少ないのは、感興に合致する元歌がなかったとも言える。

左記の二首は『二条院讃岐集』八十八番と、「民部卿経房家歌合」の出詠歌である。

おもふことありけるころ、しのびてすむところの

庭草もうちらはらふ事もなかりければ、つゆのしげく

おきたりけるを見て

①おもふことしげみにはのくさのにはに涙の露はおきあまりけり

経房卿家歌合に、久恋を

②あとたえて浅茅が末になりにけりたのめし宿の庭の白露

右の二首はともに「荒れた庭と時間の経過」を「生い茂った浅茅」で表現している。「露」と「涙」の縁語を用い、「満たされぬ想い」を滲ませている。

- ①は歌全体が下へと流れ落ちて行き、最後の句で歌の意味が判明する本来の詠歌手法である。「しげみ」は「茂」と「繁」の掛詞で、「草の葉」と「露」「涙」は縁語であり、「悲しい想いが溢れて、止めどなく流れ出る涙を止めようがない」と直接的な表現である。趣旨は「願いが叶わなかった恋」らしいが、詞書では必ずしも恋歌だとは言いが切れない。

②は初句切れ、三句切れ、体言止である。「あとたえて」と「浅茅

が末」は掛詞、「白露」は「涙」である。歌本体での説明がなくとも、止めどなく流れる涙を止め難いのは、①と変わりがない。新風の詠歌手法による説明の簡潔化と、「たのめし」を用いて歌意の理解を容易にしており、「久しき恋を」の詞書通り恋歌に再構築している。

再構築されたのは歌壇復帰前の五十六歳頃で、讃岐ならではの断切りがたい恋の余情が滲み出る歌に変貌している。

もう一例見ておきたい。『月詣和歌集』八九一番と、「正治初度百首」一九六九番の詠である。

題しらず

③難波がたみぎはの芦は霜がれてなだのすてぶねあらはれにけり

冬

④難波がた汀の風も寒えぬれば氷ぞつなくなだのすて舟

右は「なだのすて舟」を詠み出すのに、情景を動かすことなく同一画面の上で再構築している。

③は霜が降りて水際の葦が霜枯れたので、やつとすて舟が姿をみせたという説明歌で、「霜枯れ」が冬の寒さを感じさせてはいる。悠長な時間経過を詠う本来の詠歌手法である。

④は動きのある「風」を持ち込んで、より寒さを増し、ひいては氷をもたらす。氷に閉ざされたすて舟は流れ出すことはないの、構図としては同一になっている。

『月詣和歌集』は讃岐の四十二歳頃に成立し、「正治初度百首」は六十歳で歌壇復帰をした折の百首歌の詠進歌である。二首の歌の間に



は二十年程の年月が流れており、二首を較べると体言止・初句切れ・三句切れなど、詠歌手法がより繊細に高度化しているのが解かる。

ここで四十八歳頃の讃岐が「本歌取り」をした本格的な手法を、『二条院讃岐集』の「石に寄する恋」の詠により見ておきたい。本歌は『和泉式部集』に見える左記の歌である。

#### 本歌

わが袖は水の下なる石なれや人に知られで乾く間もなし

#### 讃岐歌

わが恋は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間ぞなき

二つの歌は非常に酷似しているが、次のような相違点を持つていることが解かる。

・「水の下なる石」は、「石が水の下にあること」を表現している。

・「潮干に見えぬ沖の石」は、「潮の干満にも姿を現さない石」と

いう事象を表現している。

・本歌では「人に・・・で・・・なし」と最後に平凡に詠み終えて、

係り結びではない。

・讃岐歌は「人こそ・・・ね・・・ぞなき」と係り結びを用いて、「忍ぶ恋」であることをより強調して終えている。

「本歌取り」とは、本歌からの吸収が如何に優れているかが問われるのである。「複合的表現形態」と詞使いの巧みさ、滑らかさ、吸収力の確かさ、そして斬新な詠歌手法を、俊成は高く評価したのである。

次いで題詠歌について考えておきたい。題詠歌は「事実を詠むものではないので、どのようにも操作できる。故に、歌から何かを想定

して結論付けることは出来ない」ものである。

しかし、詩人や歌人は自分の心に響く何等かの体験の感触を糧にして、自分の作品を創出していくものであり、何の感情も湧き出てこない内なる土壤から、人の心に染みる作品は生まれてこないのも、また真理である。題詠歌を詠むための土壤、即ち、人が歌を詠み出だす内なる土壤は精神状態と共に芳醇でなければならぬ。詠題に添って何をどのように詠み出すか、実詠歌をどのように詠み出すかを考えるのも、芳醇で豊かな内なる土壤があつてのことである。讃岐の歌に常には見られない勢いがあつて、それが心情を吐露したと感じられる恋の題詠歌であつたとしても、それは迸り出るような恋の情熱に裏打ちされた、生ある人間としての一面を見せているのである。

ところで「どのようにも操作できる」ということは、歌人の能力が枯渇し評判を維持できなくなった場合、当然、代作もあり得るのである。そして題詠歌には更に問題点がある。

題詠歌とは他人が小手先の操作で、「題詠歌に作り変えることが可能」であり、本人の関知しない題詠歌がどこかで創られているのである。左記の歌は『二条院讃岐集』の恋歌の一群中にある五十七番の詠である。

目の前に変る心をしらす露の消えは共にと何思ひけん

讃岐の没後十八年目、嘉禎元年（一二三五）三月十二日に定家撰の『新勅撰和歌集』が成立した。定家は讃岐の歌を十三首採り千五百番歌合から八首選んでいる。恋歌は四首で構成され内の一首は右に挙げた詠である。四首のうち三首は「千五百番歌合に」と表示され、右の

詠は「あひてあはぬこひの心を」という題詠歌に仕立てあげている。

この詠題は二人の仲が途絶えた恋を詠むのが通例である。「あふ」は下句に「あはぬ」は初句と第二句に、讃岐の意図するところがある。この歌だけを見れば、讃岐は故意に題詠歌の詠歌手法を外し、一工夫しているようにも見えるし、詠歌手法に背いているとも見える。しかし、没後の讃岐は全く関知しない出来事である。

### Ⅲ最晩年の二条院讃岐の詩的世界

#### (1)前撰政・関白藤原兼実薨去とその後

讃岐が自分の人生の大半を懸けて、側面から支え続けてきた前撰政・関白藤原兼実が、承元元年(一一〇七)に薨去した。しかし、兼実が薨じた直後の六十七歳頃から七十二歳頃にかけて、伊勢国にある自領の領有権訴訟のために、讃岐は鎌倉へ出向いていたのである<sup>(15)</sup>。高齢での長旅は培ってきた忍耐力と芯の強さを物語っているが、内なる「仕事の世界」が再度、讃岐の上に覆いかぶさって来たのである。しかし、結果は勝訴であったので、ここにおいて讃岐は「仕事の世界」から完全に決別することが出来たのである。

勝訴をして帰京した歌壇は新旧世代の交代という状況であり、「仕事の世界」に遮られた五年もの歳月は、讃岐にとっては痛手であった。それでも気丈に順徳歌壇へ復帰し、歌合にも出詠していたが七十五歳を越える高齢になり、歌壇復帰後に賭けた渾身の努力は、終焉を迎えることになった。建保四年(一一二六)の内裏歌合出詠を最後に、翌

年七十七歳頃に讃岐は一生を終えたと先行研究では考えられている。『新勅撰和歌集』の成立する十八年前のことである。

人生の最終末になって、讃岐には詩的世界の内なる「歌の世界」のみが残り、讃岐の心理状態は解放感に満たされていたと考えられる。讃岐は豊かな天分を発揮し最晩年の七十六歳頃まで、自由に歌壇活動を続けていたのである。

#### (2)晩年の讃岐歌の詠歌手法

六十歳で復帰した歌壇は、新風と言われる詠歌手法が風靡し、序詞・掛詞・縁語、体言止、初句切れ、三句切れ、詠歌手法は「複合的表現形態」となり、極めて高度な技巧を凝らした詠風になっている。それでも讃岐が難なく高度な技巧の歌を詠出しているのは、「沖の石」や「きぬぎぬ」の詠歌手法の才能が、讃岐自身に備わっていたからである。

①かはづなく神なびがはにさくはなのいはぬいろをも人のとへかし  
 ②ふけにけりこれやたのめし夜半ならん月をのみこそまつべかりけれ  
 ③あはれくはかなかりけるちぎりかなたうた、ねのはるの夜のゆめ

右の三首は、千五百番歌合せから『新勅撰和歌集』へ採入された讃岐歌である。この三首の詠歌手法を考察してみよう。

①歌意は「自分からは言わないので、あなたから私の思いを尋ねてください」である。

「大和の国」は「神南備川」をみちびく序詞である。山吹は「くちなし」、「くちなし」は「口なし」で「言わない」の縁語であり、

「いろ」は恋心を表している。

手法は「序詞」と「縁語」を用いて、複雑な詞使いで、三重層の表現を試みている。

②歌意は尋ねて来ると言った「人を待つ」が、どうやら「待ちぼうけ」となって、「月を待つことになってしまった」である。

手法は初句切れ、三句切れである。「人を待つ」「待ちぼうけ」「月の出を待つ」の三事象を絡めて複合的に詠んでいる。

④歌意は「はかないちぎり」であるが、「重層的にはかなさを強調表現」している。

手法はまず「あはれく」と詞で儂さを表現している。次いで「うた、ね」とは儂いものであり、「春の夜の夢」も実に儂いものである。「うたたねの夢」と重層的にかさねて儂さを更に強調しており、実に儂い契りなのである。

右の三首は詞使いの技法が最高潮に達している。表現の重層化もこれまで以上に進み、複雑に絡み合った形態で詠みこまれているので、複合的表現形態も重層的表現形態に進化した様相を見せている。「千五百番歌合」の頃の讃岐歌は、滑らかな言葉使い、耳ざわりのよさ、卓越した詠歌手法を持っていたので、没後の新勅撰時代の詠風にも十分に対応できたのである。

#### Ⅳ 没後の二条院讃岐歌の評価

##### (1) 「前撰政治家歌合」に見える讃岐歌

讃岐の没後、二百二十四年目、嘉吉三年（一四四三）に行われた「前撰政治家歌合」で、詞書の中に讃岐歌に纏わる経緯が語られている。前撰政は一条兼良である。

詞書に一首。

左歌は、なほきぬぎぬになりやらでといへる歌の待るは中古の歌とおぼえ侍るよし申す人あり、ただしいづれの集また作者などまでをば不覚悟にや、……後日に引勘待れば、

新古今に二条院讃岐が歌、明けぬれどまだきぬぎぬになりやらで人の袖をもぬらしつるかな、と侍りけり、……

口調のよい歌の一部分が人々の口の上に出してきたのは、讃岐の歌が時代を超えて、余情を感じさせていたことの証である。二百二十余年を経て人々の意識の底に生きていたのである。

##### (2) 「藤川五百首」鈔に見える讃岐歌

讃岐の没後二百八十年頃、定家の『藤川百首』に歌人五人の百首を加えて、明応年間（一五〇〇）以降に後人の手で成立したものが『藤川五百首』である。その後、寛文七年（一六七七）讃岐の没後四百四十九年目に、『藤川五百首』鈔を注釈書として再版している。『藤川百首』では定家が自分の心情を、讃岐の釈教歌（新古今・一九六六）に託している。

〔霜埋落葉〕

朝霜の庭の紅葉ば思ひしれおのがしたなる苔のころを

如是報の心なり、又、讃岐が歌に、

うきも猶昔のゆゑと思はずばいかに此世を恨み果てまし

歌壇の指導者である定家が、「女の歌」の指標的な存在であった讃岐の歌へ、自分の心情を重ねていたのである。法然上人のよき理解者であった前撰政・関白藤原兼実の存在を始として、仏教思想の浸透により、和歌の世界でも釈教歌が盛んになった社会的背景も指摘できる。

(3) 二条院讃岐の歌と連歌師宗祇

讃岐の没後二百八十年余、宗祇の自撰連歌句集『萱草』が出た頃、讃岐の歌は連歌の世界へと繋がっている。宗祇が選んだ讃岐歌は『新古今和歌集』五九〇番の歌である。

世にふるは苦しき物をまきのやに安くもすぐる初時雨哉

宗祇は『定家十体』で有心様に分類された讃岐歌を、本歌取りにして次の発句を詠じている。<sup>16)</sup>

世にふるはさらに時雨のやどり哉

宗祇

六十歳を越えた老練な宗祇の心に、人生経験を経て感じる奥深い余情が響いたからであろう。「生きていくことは大変苦しいこと」である。しかし、「降って来たかと思うと難なく通り過ぎていく」初時雨である。「ふる」の複合的表現手法を用いた詞使いの巧みに、更には讃岐歌の芸術性の高さに、宗祇は心を惹かれたものと考えられる。

おわりに

讃岐の内なる詩的世界の構造について考察を進めてきたが、讃岐の人生には三つの内なる世界の関わりが明らかになった。時には「出自」が縛り、時には「仕事の世界」に厚く覆われたこともあったが、それらが讃岐の詩的世界から消滅したとき、讃岐の内なる「歌の世界」が輝きを取り戻し、新たな詠歌手法が自ずと生み出され、讃岐の歌は光を放つのであった。

讃岐の歌は詠出の現場から慎ましく身を引いて、第三者的な視点をもって詠じているのを特徴とする。自己を前面に押し出さず、感情の昂ぶりも見せず、優しい表現で相対する人物に非難の感情も見せてはいない。従って高い芸術性を持っているので、『歌仙落書』が推奨する理想的な「女の歌」であり、更には讃岐自身も「期待される女性像」そのものであった。

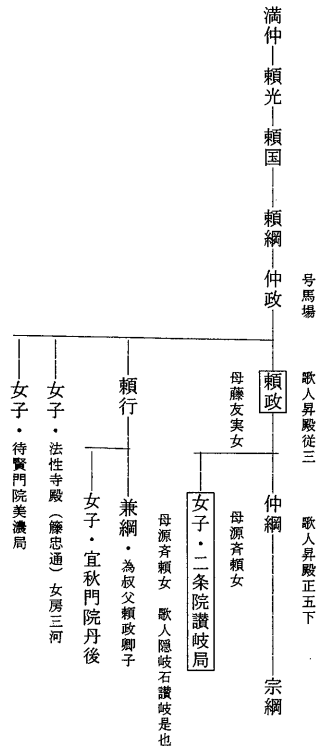
讃岐の詩的世界は「仕事の世界」「歌の世界」「出自」と三重構造の内なる世界が形成され、歌の詠出に色濃く反映していたのである。平家没落により「出自」の枷が解消すると歌才が開き、「沖の石」の意表を突く新たな詠歌手法が現れた。四十六歳頃から六十歳にかけては「仕事の世界」の束縛を強く受けている。宿願の歌壇復帰は内なる「仕事の世界」からの脱却と考えられる。脱却後の讃岐は本来の歌才を発揮し、如何に「仕事の世界」が讃岐の才能を閉じ込めていたかを明らかにした。最晩年の讃岐の詩的世界は内なる「歌の世界」のみとなり、心置きなく詠歌に専念できる環境にも恵まれた。そして讃岐の

内なる「歌の世界」は、没後へと繋がっていったのである。

讃岐の歌はその根底に歌林苑風の歌風を持っている。俊恵は讃岐の歌を高く評価し、俊成も讃岐の歌才を認め、讃岐と多くの接触の機会があった定家もまた、讃岐の歌才を高く評価していたと考えられる。讃岐の「詩的世界」の三重構造は、讃岐の人生をも左右する、極めて強い影響力を持つものであったと結論することが出来る。

〔注〕

(1) 家系図「二条院讃岐」 清和源氏 第二満仲息男頼光頼親頼平頼範等流



(2) 拙稿『玉葉』に見える二条院讃岐像

『花園大学国文学論究』 第三十三号 平成十七年十二月

(3) 「詩的世界」(『詩学』創作論) 本文p275-358 『世界の名著』

第8巻 中央公論社)

ここに言う「詩的世界」とは「創作論」の中に見える「創作」或は「虚構」による世界のことを指す。アリストテレスは「詩人」を「作る

人」と規定し、「模倣」により真実を伝える人を「詩人」と言う。「和歌」

を言語による創作芸術と捉え、我國の歌人もこの範疇に含めて「模倣論」を援用し、西洋的概念との交流の中で「和歌」創作の理解を深めたい。

讃岐が「模倣」したのは自身の「心象風景」であり、この風景は「模倣」された「虚構」の世界で現実のものではない。多様な要素が複雑に融合した、複合体としての心象風景を、「和歌」という言語芸術で「模倣」したと考える。讃岐の歌をこのような複合体として捉え、可能な限りその構造を解明しようとするものである。

(4) 『冷泉家時雨亭叢書』 卷二十六 朝日新聞社 一九九五年

(5) 『新編国歌大観解題』によれば「二条院讃岐集」の総歌数は九十八首であり、題詞や詞書などから推して作者自撰と考えられる。月詣集との関連や、家集の形態から、賀茂重保の勅進に依るいわゆる「寿水百首家集」の一つと考えられている。

(6) 『新編国歌大観解題』によれば「重家集」は守覚法親王に奉った自撰歌集で、重家とその周囲の作歌を編年的に配列し、歌壇史の重要資料である。重家は頭輔の子で清輔の弟。大治三年(一一二八)〜治承四年(一一八〇)。諸国の守、刑部卿中宮亮を歴任。従三位太宰大式。安元二年(一一七六)出家。法名運寂。

(7) 『歌苑抄』に見える讃岐歌の評価。鴨長明は『無名抄』(岩波日本古典文学大系)の中で、俊恵が讃岐歌に高い評価を与えていることを述べている。

〔代々恋歌秀歌事〕 俊恵語云、「・・・しかるを、俊恵が哥苑抄の中には、一夜とて夜離れし床の小庭にやがても塵の積りぬる哉 是をなんおもて哥と思ひ給ふるはいかゞ侍らん」とぞ。

(8) 左記は『尊卑分脈』に見える「藤原重方」の家系図である。葉室一流祖 第五内大臣高藤七代孫大藏卿為房二男按察使顯隆孫

頼隆——頼能——重方——重頼——重光——女子

有頼

右記の重方から連なる重光と有頼の母が、「従三位頼政女二条院讃岐」と記されているので、先行研究では重頼と讃岐の結婚説がこれによって推測されており、讃岐は二人の男子を儲けたとされている。しかし、重頼との結婚説を裏付ける資料は見当たらない。

(9) 松野陽一「歌仙落書」考——千載集時代秀歌撰研究統紹——

(10) 脇谷英勝「二条院讃岐の「沖の石の」詠について

——特に和泉式部の「水の下なる石なれや」詠との相関を中心に——

〔帝塚山大学論集〕 4号 昭和四十七年九月

(11) 片山享・近藤美奈子編『九代集抄』下 (『古典文庫』No.四三五) 九八二年

いそにある石は乾ても濡てもよくみゆるにおきにある石なれは見えぬ也、そのことごとく吾袖のぬる、事かはくまもなくこをわか思ふ人はしらすぬと也、かゝるたくひは古来あるまじきと也。

(12) 『玉葉』建久四年(一一九三)三月廿八日条、三月廿九日条に「北政所」の春日参詣がみえる。

(13) 『新編国歌大観』によれば、民部卿経房家歌合が建久六年(一一九五)正月廿日に行われた。歌合出詠の右の歌人は、院富門院大輔、沙弥生蓮・師光、中宮讃岐、二条院三河内侍、関白家丹後、その他十八名である。左の歌人は省略する。判者は皇太后宮大夫入道积阿であり、題は山花、初郭公、暁月、深雪、久恋である。拙稿では讃岐が中宮付きの女房ではないことを検証済みである。

(14) 『新編国歌大観解題』によれば「三百六十番歌合目録」に、「讃岐十三首宜秋門院女房」と見えており、併せて「丹後十八首 九条殿女房」の記

載も見える。しかし、宜秋門院女房としての讃岐の勤務実態はない。

(15) 『吾妻鏡』承元元年(一二〇七)十一月十七日条。

(16) 小西甚一「宗祇」(『日本詩人選』16 筑摩書房 一九七一年)

(いさ みちこ) 文学研究科国文学専攻博士後期課程

(指導：黒田 彰 教授)

二〇〇七年九月二十五日受理